

中央大學研究會第五回例會

我大學研究會第五回(第一部會)は十月二十八日午後四時學員俱樂部室で開かれ、高木信威教授の「最近歐洲の外交經過」に就ての講演があり、終つて故稻田周之助博士の論文出版に關し協議を遂げ天野、玉浦、高木、柴田、松浦、川原の六氏を實行委員に擧げ午後八時散會した。出席者は講演者の外生出、和田、川原、玉井、丹後、長崎、松浦、天野、三浦、三輪、柴田、杉本の諸氏であつた。高木教授の講演要旨は左の如くである。

歐洲の外交事情を明かにするには英露、英佛、英獨、英伊、佛獨、獨露、佛伊、獨伊、伊露及び右列國と巴爾幹諸邦其他大戰の結果建國した新國家との關係並に巴爾幹諸邦内の關係、建國新國家間の關係等に付て述べねばならないが、短時間内に能する所でないから極めて粗策ではあるが概觀的に説く外はない。歐洲最近の問題といへば佛伊間、獨逸波蘭間の問題もあるが英露問題と獨佛問題とが何と云つても最近外交の中軸を爲して居る。伊國がチラナ條約に依りアルバニアと結び、東歐小協商國の一たる羅馬尼と協約し、小協商國主としてチエツコスローヴァキ

アの敵視するハンガリーと條約を締しユーゴスラヴィアの敵國ブルガリアを傘下に收めた爲にユーゴスラヴィアを孤立の域に陥れたことはユーゴスラヴィアをして非公式外交即ち新聞に依つて獨逸及び土國に對し三國同盟締結を提唱せしむるに至つた。獨逸政府は之に對して何等意見を發表しないが、ロカルノー條約以後、歐洲の平和は恒久に維持せらるべき保障の成立した如く悦ぶ歐洲に激動を與へたことは云ふまでもない。殊に露國との外交關係を破るべき準備中の英國が歐洲聯合を以て露國に當るべき意向を有して居たことは其の外務省の代辯者に依つて公にせられた議論にも明であるが、最も憂慮するのは獨逸の向背であつて、殊に獨逸が露國との協約國であることは計畫に對して少なからぬ障礙である。此の際、本年五月佛國大統領の外相帶同倫敦皇室訪問の事あつて、此に英佛協商復活祭は行はれたのであるが、此のアンタン・コーヂアルなる一九〇四年四月の締約に依つて存在を見るに至り、附帶せる軍事協約に關する文書より推して目指す所は獨逸であつた關係から、其の復活は即ち對獨施爲に外ならないと信すべき理由がある。此の機に於て英佛兩外相の商議行はれ、或はライラント撤兵其の實滅兵問題は右商量の

中心問題であつたと傳へられて居る。ライン撤兵はロカルノーの結果で、同時に獨逸がヴェルサイユ條約の條項履行に忠實なる限、速に實行に移る筈であつて、英國の輿論は其の促進を説いて居たに拘らず、本年六月ルネヴィユに於ける佛國首相ボアンカレ氏の演説は、獨逸の戦争責任を論じてライン占領繼續の意思鞏固なるを示したものであつた。獨外相ストレーゼマン氏は議會に於ても、諾威の首府に於ても之に對して佛國の執る所はロカルノーかルールか(ルール占領はボアンカレ氏の前に之を行つた所)と叫び、ライン撤兵のロカルノーの約束なることを力説した。而して英佛は右撤兵に付て意見の一致を求むるには至つた。尤も右撤兵の數は勿論獨逸の欲する所と尙ほ懸隔あることは論を待たない。此の如く佛國が獨逸攻撃を蒸返し、英國が減兵に於て獨逸に讓歩を示すが如き寬嚴兩様の外交は、獨逸を國際聯盟に参加せしめた今日、之をして其の圈内に於て英佛と協調せしめ、仍て露國を孤立せしめやうとするにあつて、英佛協商復活と同時に英國が露國と外交關係斷絶を行つた眞意も推測を容るべき點あるが如く思はる。

又ロカルノー條約は英國の斡旋、獨逸の提議に依るも

のでライン撤兵の事よりも根本問題として軍縮實行は當然之に伴はるべきものとされて居た。軍縮は大戦後、國際聯盟規約の目的とし、一九二四年ジュネヴ議定書草案に之を明舉した所で、既に米國主催の華盛頓會議及び近頃開かれて結果を見なかつた米國提唱の軍縮會議以外、聯盟主催の準備委員會ある所以である。蓋し軍縮の觀念は一八一四年維也納會議の開かるゝに方つて、佛國當時の外相タレーランの條約草案にも之を載する所で、其の條文は一九二五年佛國軍事專家が國際聯盟主催の軍縮會議の爲に起草した所と符節を合するが如きものがある。而してタレーランの説は闇から闇に葬られて成立を見なかつたが、聯盟のやらうとする軍縮は果して成功すべきや否や。平和條約締結當時の政治家は民族自決を以て平和招來の一因なりとした。然も民族自決あつた爲に新に建國した國家は軍備を新に起した爲に今日歐洲の陸軍は、戰敗國の軍備を制限したに拘らず、戦前と略々同數を示して居る。是れ軍縮の障礙であつて同時に、此の障礙を人ならしめる各國軍備維持の理由がそれらにある。是れ獨逸が列國に求めて軍縮は宜しく獨逸の例に倣ふべきで、平和條約第五編の劈頭規定する所の如くでなければならぬといふ所以で

ある。歐洲が幾多の問題を有しつゝ、今尙ほ軍縮實行に至らないのは、獨佛兩國間依然問題を有する以上重大な問題である。

要するに軍縮の實行は國際聯盟の事業として平和と重大關係ありと云ひながら、果して理想せらるゝ如く行はるるや否や疑問である。是れ戰後國際主義の殊に重んぜらるゝに拘らず、各國皆各國自らの爲にする國民主義に基づき、従つて強者の權利思想は十九世紀と同じく、依然として強く、やゝもすれば當時武裝的平和の行はれた時代に逆戻する事はないとしても其れに近い虞れがあつて従つて此の問題は前途尙幾多の難關がある。又ライン撤兵問題は幸に英佛意見の一致を見るとして之に臨むに方り、獨逸の希望通りには行かぬとしても、獨逸は聯盟に依つて自國の目的を遂行すべき利益を思へば、全然露國側にのみ立つて此の機會を逸することなかるべく、従つて英佛の承諾する撤兵其の實減兵に甘んずる外ないであらうと觀察せらる云々。